

平曲吟譜新集 卷十一

那須与一

平家正節一之下、名古屋伝承句

官五位の尉は成れし時
 是を五
 成て太史思と呼れし
 也一の谷の後
 越をも化るもそぞ
 中り落さるる
 才の忠伝を始とて
 是を見る侍共
 の為に命を失ひ
 事金く露
 夜も惜うらじとぞ
 惜るる

那須与一



文化庁
平成21年度文化庁
芸術団体人材育成支援事業

本コンテンツは、文化庁の委託業務として、平曲研究所が実施した平成21年度芸術団体人材育成支援事業 鳴海家本「平曲吟譜新集」に関する情報交流の成果を取りまとめたものです。

従って、本コンテンツの複製、転載、引用等には文化庁の承認手続きが必要です。

口説 去程よ阿波讃岐よ平家を知りて
 源氏を待ける兵者たあそこの峰爰の回
 より十四五騎二十騎打連くこ来来る程
 は判官程三言余騎よそ成あひぬ
 日暮ぬ猶負を改走へくらひ連源平よ
 引退く爰よ爰よ仲の方より尋常よ
 飾する小舟を一艘汀へ向てぞ漕せらる

渚七八反もも成しりい舟を横櫓よ成
 あれいりいと見え爰よ舟の中より年の
 齡十八九斗成女房の柳の五衣は紅いの
 袴着しうるが皆紅いの扇の日おしる
 在舟の下ケ背がいは杖こ立連陸へ向
 てぞ招きらる白影判官後後兵衛実基を
 互あれいりいと宣へハ村よとこそ

いふあれ但大將軍矢面は進て傾城を攻
 説せられんを多垂は現て村をど
 謀事とこそ存ひへ去るがも廟を村さ
 せりる可もやひふりんとやれい
 方な村つ可仁に誰る傳と宣へば
 た多ふひふ中は下地玉の住人那は太
 助るが子は與一宗有連小兵そはひわ

へだる利てひと
 授はいりよと宣へば
 在華ふて三よ二は必村を
 くれは判官更與一呼とてられ
 與一其比は末二十斗の男也
 神を以て任び社で彩るる
 白の禮着て足白の太刀を佩二十四指と

る截生の矢負^{コア}落^上截生^{コア}の雁^{コア}の羽^{コア}割^{コア}合^{コア}
 て知^{コア}どう^{コア}なる^{コア}兎^{コア}目の^{コア}痛^{コア}を^{コア}ぞ^{コア}差^{コア}添^{コア}する^{コア}
 滋^{コア}飯^{コア}の^{コア}弓^{コア}服^{コア}は^{コア}校^{コア}に^{コア}甲^{コア}を^{コア}バ^{コア}脱^{コア}てる^{コア}紐^{コア}を^{コア}
 下^{コア}掛^{コア}判^{コア}官^{コア}の^{コア}法^{コア}最^{コア}は^{コア}畏^{コア}る^{コア}る^{コア}へ^{コア}
 は與^{コア}一^{コア}あ^{コア}の^{コア}扇^{コア}の^{コア}生^{コア}中^{コア}対^{コア}を^{コア}款^{コア}は^{コア}見^{コア}物^{コア}を^{コア}
 せ^{コア}より^{コア}し^{コア}と^{コア}宣^{コア}へ^{コア}バ^{コア}服^{コア}仕^{コア}つ^{コア}て^{コア}存^{コア}ひ^{コア}に^{コア}あ^{コア}の^{コア}
 扇^{コア}対^{コア}換^{コア}する^{コア}存^{コア}る^{コア}に^{コア}長^{コア}き^{コア}味^{コア}方^{コア}の^{コア}饒^{コア}

弓^{コア}矢^{コア}の^{コア}所^{コア}を^{コア}ひ^{コア}ら^{コア}ふ^{コア}所^{コア}一^{コア}定^{コア}仕^{コア}つ^{コア}る^{コア}に^{コア}
 は^{コア}任^{コア}付^{コア}ら^{コア}る^{コア}所^{コア}も^{コア}や^{コア}ひ^{コア}ら^{コア}ふ^{コア}に^{コア}と^{コア}
 連^{コア}判^{コア}官^{コア}大^{コア}き^{コア}な^{コア}ぬ^{コア}ぞ^{コア}甲^{コア}弱^{コア}今^{コア}夜^{コア}豫^{コア}念^{コア}を^{コア}立^{コア}
 て西^{コア}玉^{コア}へ^{コア}振^{コア}り^{コア}ん^{コア}ず^{コア}る^{コア}者^{コア}だ^{コア}は^{コア}皆^{コア}義^{コア}理^{コア}を^{コア}命^{コア}
 ち^{コア}ハ^{コア}背^{コア}く^{コア}へ^{コア}ら^{コア}ん^{コア}に^{コア}白^{コア}影^{コア}ま^{コア}よ^{コア}し^{コア}も^{コア}子^{コア}細^{コア}を^{コア}
 存^{コア}ぜん^{コア}飯^{コア}原^{コア}は^{コア}是^{コア}す^{コア}う^{コア}候^{コア}と^{コア}豫^{コア}念^{コア}へ^{コア}下^{コア}る^{コア}
 所^{コア}と^{コア}ぞ^{コア}宣^{コア}へ^{コア}る^{コア}服^{コア}今^{コア}一^{コア}を^{コア}そ^{コア}辞^{コア}せ^{コア}バ^{コア}悪^{コア}り^{コア}

かんもや思ひんたひにぬれんを存主上
 らにば夜でひりハ仕つてこそ見ひめ連主上
 葉を落立黒るの太ふ還ぬるなばや主上
 招しる金度悔の鞠をちてふさる主上
 がり取越しる徳操操て江へ向てぞ主上
 歩ゆセる主上 日説 方の方の兵者たふ一が後主上
 を還よ見送つて一定仕着者仕る可主上

存ひとせられハ等 判官も頼しき衆よぞ主上
 見玉ひる矢比少遠りりれハ海の面一主上
 反斗打へうられだ未庵の間ひ陽七主上
 反斗も連存りんどぞ見へし主上 甲子 此ハ月主上
 十八日 照 画の刺針の連事あるハ服主上 ち主上
 前山風 連烈ぬて上 碓打浪もさる主上
 引一 甲服 舟ハ海 連 海 居て漂ハる主上

も串は定りて賜めいろう 下り 沖は平
 家船を一面は並べて見物す陸は源
 氏書之を拵て是をえる何れも何れも
 晴成すと 詔 云事 詔 与一 下音 眼を
 塞で南望八幡太菩薩別して我
 の神明 上音 連 日光の権現宇都宮那
 須の湯泉大明神願ふあの扇の生

中村さそて賜せ玉へ対換する祓成は
 切折自害して人よ再び面を向ふんば
 比今一度本玉へ帰さんと思し終は矢
 如さる玉ふると心の中は祈念して目を
 見開てこれバ風少し 下 吹強て庭も村
 好こそ 詔 成はれ 詔 与一 下音 福を
 取て番能引て兵と放つ小兵と云糸十

二束三伏 ニそんしつふせ **上音** 弓ハ強シ ユミハツヨク 福ハ浦ヨる フクハウヨル 夜 ヨ
 長 ナガ 悟 アハレ しく 誤 アヤマ ぐ 廂 セウ の 要 ヨウ 際 サイ 寸斗 スント 並 ナミ
 て テ 爆 ハツ とぞ 村 ムラ 切 キ する 痛 イタ ハ 海 ウミ よ 入 イリ ル バ バ
 扇 アウ ハ 空 ソラ へぞ 上 アガ リ ム 春 ハル 風 カゼ よ **三重** 照 サウショウ 二 ニ 様 サマ
拾連 二 ニ 様 サマ 様 サマ れて 海 ウミ へ 刻 キ とぞ 散 チ ち ち チ ム
 皆 みな 紅 ベニ いの 扇 アウ の 日 ヒ おひ する 夕 ユフ 日 ヒ は 輝 ヒカ ひ
 て 白 シロ 波 ナミ の 上 ウヘ は 浮 ウキ ぬ 沈 シヅ ぬ 淘 ウラ れ ち ち チ ム を

沖 ウキ は 平 ヘイ 家 カ 船 フネ 端 ハタ を 扣 ヒキ て 感 カン し して 下 **下** 陸 リク
 は 源 ゲン 氏 シ 腕 ウデ を 扣 ヒキ ひ て 登 ノボ る ち ち チ ム

弓流

口説 感 カン は 堪 カン じと 覚 サト えて 船 フネ の 内 うち づう 年 とし の 数 かず
 五 い 十 じ 斗 と 成 なる 男 おとこ の 黒 クロ 糸 いと 威 い の 禮 れい 義 ぎ する 白 しろ
 柄 え の 雜 あそび 刀 や 杖 じょう は 突 つ 廂 セウ 立 たち する 玉 たま は ち ち チ ム
 舞 マユ 臺 だい ちう 伊 イ 勢 せい の 三 さん 節 しやく を 盛 も ち 一 いつ が 後 あと へ 歩 ある ち ち チ ム